



パネルディスカッション

「地方から日本（世界）を変える」

コーディネーター：時任 宣博	（化学研究所長・教授）
ゲストパネリスト：矢原 徹一	（九州大学大学院理学研究院教授）
小林 清人	（読売新聞西部本社編集委員）
パネリスト：寶 馨	（防災研究所教授）
森 知也	（経済研究所教授）
カール・ベッカー	（こころの未来研究センター教授）



パネルディスカッション
地方から日本（世界）を変える

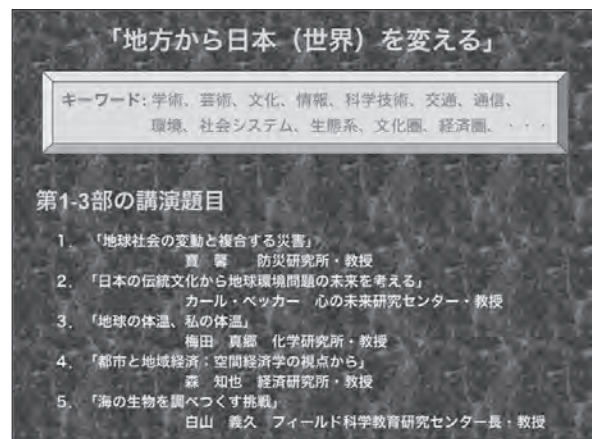
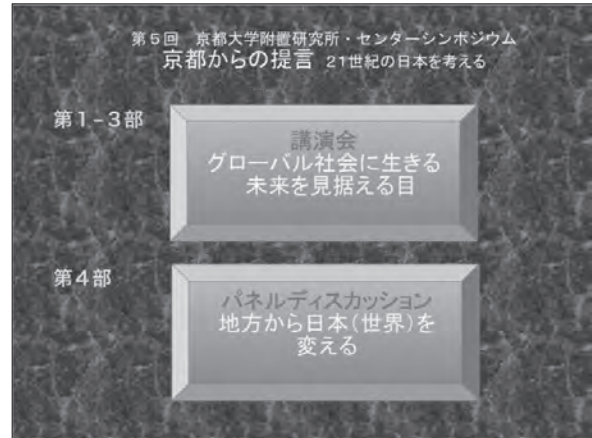
時 任 では、第4部ということになりますけれども、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

第1部から第3部、午前・午後と色々な分野の先生方から講演をいくついただきました。今回のサブタイトルは、「グローバル社会に生きる」ということで、「未来を見据える目」という形でお話をいただいたんですが、いろんな視点からのお話があったと思います。

講演終了後に会場から質問票を回収させていただいたんですが、お昼休みまでにいただいた分は、少しこちらで整理させていただいております。たくさんいただいておりますので、すべての質問にはお答えできかねるかとも思いますが、できるだけお答えしたいと思っております。また、本日の講演に関係するものを優先させていただきたいというふうに考えておりますので、よろしく願いいたします。直接のご質問は、ちょっと時間の関係上、受け付けかねますのでよろしく願いいたします。

そして、このパネルディスカッションにもサブタイトルがついておりまして、「地方から日本（世界）を変える」となっております。午前のタイトルと午後のタイトルをどんなふうに集約するか、非常に難しいと思うんですが、パネリストの皆様方の協力を得て、できればいい結論なり感想が持てるようにしたいというふうに思いますので、よろしく願いいたします。

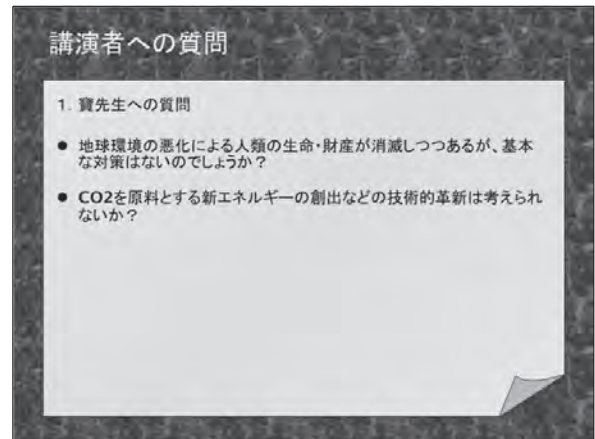
それでは、ここに、私がちょっと思いつくままに書いてみたキーワードを、「地方から日本を変える」という形ですので、何かキーワードがないと難しいかなと思ったんですが、幾つか挙げてみました。今日は、京都大学の附置研センターの一部の活動を紹介しましたが、我々が携わっているものは、学術、芸術、文化、情報、科学技術、交通、通信と、いろいろとあると思うんですが、後半のほうで生態系云々というのもし出してきましたし、地方、日本、世界というふうに、文化圏の



違い、経済圏の違い、いろんな形のキーワードがあるかと思います。そのあたりを、ご自分の専門になるべく近いところのほうがお答えしやすいかもしれませんが、まとめたいと思います。

たくさんいただいている質問なのですが、お昼休みにいただいたものを幾つかちょっとここに上げさせていただきました。

寶先生に、——順番に行きますけれども——1つ目、地球環境の悪化による人類の生命財産の消滅に対して基本的な対策はないのか、こういう非常に大きなことを聞かれております。先生、今日は水を中心にお話しになりましたけれども、寶先生、何か基本的な、要するに抜本的な対策というのはあるんですか。環境悪化



というのを——防災的な視点からでも結構ですけれども。

寶

生命財産が消滅しつつあると書いてありますけれども、人口はどんどん増えておりまして、資産もどんどん増えているわけですね。それによって災害が起こりやすくなっている、被害も発生しやすくなっているというわけですが、消滅しつつあるというよりも、脅かされているということですよ。

ですから、脅かされないようにする、と。戦わずして勝つというか、危ないところには行かないといいますか、危ないところには住まないとか。あるいは都市化の問題があるわけですが、なるべくそういった余計な集中をしないということですよ。

同じ死ぬにしても合理的に死にたいというか、あきらめて死にたいといいますか、理不尽な政策によって殺されたり、戦争で死んだりしたくない、と。

ただ、日本の場合は、天災で死ぬ場合にはあきらめもつくというようなところもありますけれども。しかしながら、何でそんなところに住んでいたんだ、といった形では死にたくはない。あるいは、なぜそんな危ないときに、そんなところへ行っていたんだという形では死にたくない、あるいは財産を失いたくないというわけですから、やっぱり1人1人が賢くなることが大事だと思います。

今日のような私のお話を聞いていただいて、知恵を得ていただく、と。

時 任 それこそ、本当の防災、減災をちゃんと心がけるということですかね。

寶 そうですね。やっぱり自分の命は自分で守るわけですから、自分が生き延びられるように振る舞うということじゃないですかね。

時 任 先ほどの休み時間にいただいた質問に、NHK スペシャルのメガクエイクをごらん

なった方から、「こんな国に住んでいて、どれくらい本当に危ないんでしょうか?」、という質問が来ているんですが。

實

本当に、世界的に見たら、日本はすごく風光明媚で大変いいところなんですけれども。食事はおいしいし、風光明媚であるし。ですけれども、その分、すごく危ないところに住んでいるわけですね、日本国全体が。ですから、その割に、ものすごく地価が高いというわけで、その地価の高さに我々は一生悩まされているわけですね。

そういうところが大変残念ですけれども、ですから、日本人がうまく生活して、地価が安くて済むように、我々の働きがうまく自分たちの潤いに生かせるようにしていきたいなという感じですけど。

時 任 わかりました。どうもありがとうございました。

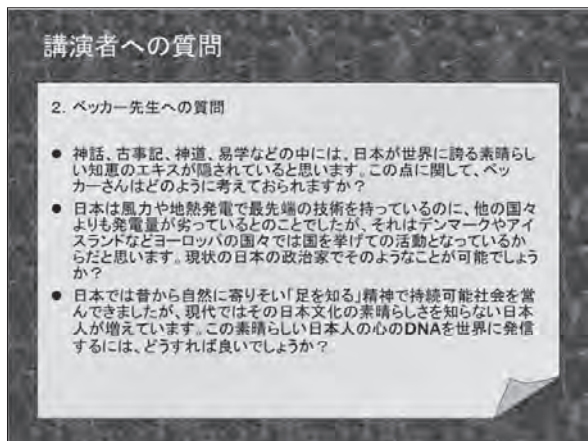
2つ目の質問は、多分、防災研究所の先生よりは、エネルギー理工学研究所の先生あたりがお答えになるといいと思うんですが、多分、非常に長いことになってしまうので、ちょっと實先生にご質問するというよりは、これはちょっと飛ばさせていただいて、こういう質問もあったということで。

ちょっと次、時間の都合もありますので、ベッカー先生に移りますが、ベッカー先生のやつはいっぱい来ております。

1つ目が、先生、日本の文化に非常にお詳しいということで、神話とか、古事記とか、神道とか、そういう日本の知恵が生かされるような場合があるんじゃないかと。先生、どんなふうに思われますか、日本の古い、こういう文化に隠されているような知恵というのは何かおありですか。

ベッカー 先ほどの CO₂のご質問に少しお答え致しますと、CO₂をエネルギー自体に置きかえることはできませんが、植物等には使うことができます。したがって、上手に植物を使って、光合成によって CO₂を吸収してもらい、それを循環させることができれば、悪化の一端をたどることはないと思います。

また、神話は極めて文化的なものですから、日本の発想をそのままの形で外国に持っていこうとすると、外国には通用しません。外国ではだれも信じてくれませんし、若い日本人でさえ日本神話を信じていません。すなわち真理を用いるしかないのです。その真理というのは、人類はみんな太陽の子ということです。地球自体が太陽からやってきて、その上で我々が進化していますし、我々の体をつくっている分子も、本来、



太陽の分子であったものです。そういった科学的な考え方と言えば、人類は太陽とつながっています。先の科学者も示したとおり、人類は同じ地球上で共生しており、比喻ではなく科学的に見ても海は生きていますし、川も山も生きています。海、山、川が生きているという意識を、神話としてではなく、科学として伝えることは可能だと思います。だからと言って、すべての物体に霊的なモノが宿っているなどという神話的結論まで持って行く理由はありません。

時 任 2つ目は、先生が数値を挙げておっしゃった「日本が4位、5位であるという、それは、かの国の政治家が優秀であって、日本の政治家で大丈夫でしょうか」という、そういう質問です。

ベッカー 1973・4年にオイルショックが起きました。そのときに、アメリカの議会が、燃費のよい車を規制でつくらせようと考えました。それに対してフォードやGMが、様々なロビーイングをすることによって、アメリカで燃費の良い車をつくらなくていいように裏切ったのです。ところが、トヨタやホンダなどの日本メーカーは、それでもアメリカ人は燃費のいい車を買うに違いないと考え、ホンダのシビック、トヨタのカローラなどをどんどんアメリカに売り出しました。これが日本の成長期の出発点の一つです。

つまり、政府が動くのを待っていたのではいつまでたってもうまくいきませんし、政府は将来をうまく担い切れなところがあります。政府というよりむしろ、消費者に向けて物を売れば売れます。

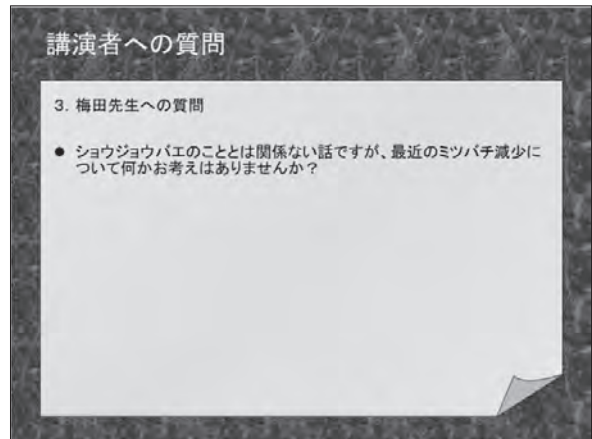
日本の会社・企業は、日本の市場をよく認識しています。したがって、日本ではなく世界の市場をもっと徹底的に調べて、どこにどういうニーズがあるのかを把握し、それに向けて、地熱発電や風力発電などの技術開発を進めれば間違いなく売れます。確かにデンマークやアイスランドなどの小国は、それなりのプラス・アルファの資金を政府からもらっています。しかし、トヨタなど日本の大企業は、デンマークやアイスランドよりもずっと財産を持っているのです。政府からの要請を待つというよりは、むしろ先見の明で、地球規模で何が求められているのかを見抜いて行動に移せばいいと思うのです。

時 任 あと、もう1つベッカー先生への質問がございます。「先生のおっしゃった素晴らしい日本人の心を最近の日本人が忘れているのではないか？」ということと、また「これをどうやったら世界に発信できるか？」という質問です。

ベッカー 「足るを知る」とは、要するに、省エネです。日本が少ないエネルギーや少ない資源でこれだけ素晴らしいことができるということを世界に示せばよいと思うし、端的に言えば、これも売り込むことができると思います。

時 任 「いいものをつくって、ちゃんと示せば世界も変わる」と、そういうことかと思います。
ではその次の質問ですが、梅田先生（パネリストではないので会場に下がられている）

に対して1つ頂いているんですが、「ショウジョウバエとは関係ないですが、最近ミツバチが減少しているというニュースをよく聞きます。これについてどうお考えですか?」というものです。梅田先生、今客席で困ったなという顔をしておられますが、ちょっと専門外でお手上げなのかなというふうに思います。どなたか、生態系の先生とかでお答えを頂けませんか?



梅 田 私よりか、私の後ろにいらっしゃる生態学研究センターの所長の椿先生がご専門だと思うので、お願いいたします。バトンタッチ。

椿 生態学研究センターの椿と申します。

私がミツバチのことをやっているわけではないんですけれども、学生でミツバチのことを、遺伝的なことを調べている学生がいて、その男から聞いた話のうろ覚えなんですけれども、ちょっとお話しします。

最近、確かに日本でミツバチの飛ぶ姿を見る機会が少なくなっています。それとタイミングを合わせたように、アメリカでミツバチの巣に病気がたくさんはやって、養蜂家が壊滅的な打撃を受けているという話が、多分重なってしまって、日本でもその病気がはやっているんじゃないかという心配なんだろうと思いますが。彼の話によりますと、どうも養蜂家が、経営がうまくいなくて、どんどん減っている。これが原因じゃないかというようなことを言っていました。アメリカで見つかっている病原体は、日本の巣からは、まだ見つかっていませんので、今のところ大丈夫なんですけど、もしアメリカから巣箱を買ったりして、養蜂を始めたりすると、広がってしまう可能性がありますので、そこらへんは気をつけたらいいかなと、そういうふうに思います。以上です。

時 任 どうもありがとうございました。

私がコンピューターに入れられるような(画面でご紹介できるような)質問はここぐらいまでだったので、この後ちょっとこの時間を使って、後半の質問を質問カードから拾わせていただきます。

さて、先ほどご紹介いただいた九州大学の矢原先生がゲストパネリストとしておいでになっています。ここで、矢原先生がパネルディスカッション用の資料を準備してくださったということで、話題提供ということで、10分から15分ぐらい、先生のお話をここでいただきたいと思います。よろしくお願いします。

矢 原 今回、京都大学のシンポジウムにお招きいただきまして、どうもありがとうございます。

先ほど紹介いただきましたけれども、私自身、京都大学出身でして、こういうお手伝いの機会をいただいたことを大変光栄に思いますし、出身は地元福岡でして、大学に入るまで糸島、前原市役所のすぐ近くで、週末はといえば植物採集ばかりしていたんですけれども。そういう糸島の自然の中で昆虫や植物に興味をもって、当時京都大学の先生が図鑑を出しておられたので、京都大学に行けば植物の分類の勉強ができるのかなと思って京都大学に行ったという経緯があります。

日本の野生植物について、できることなら全部知りたいというような思いで、日本の植物を研究して、それ以後、メキシコとか、ブラジルとか、あるいはオーストラリアとか、最近アフリカにも行きまして、一応世界5大陸の植物を見て回って、楽しい人生を送るつもりでいたんですけれども。最近、午前中もお話があったかと思いますが、温暖化とか、種の絶滅とか、さまざまな地球環境問題が深刻になってまいりまして。実は午前中、話を聞けなかったんですけど、けさ、午前0時にバリ島の国際空港をたちまして、お昼に成田に着いて、それからこちらに来たので、駆けつけてきたんですけれども、そういう意味で、地方から世界へ、あるいは世界から地方へと行き来している人間です。

バリ島で何をしていたかといいますか、別に踊りを見ていたわけではないんですけれども、実はレセプションで踊りがあって、私も壇上で踊ってきたんですけれども、それはレセプションでして。そのレセプションが終わってから、またシンポジウムのディスカッションのレポートを深夜まで書いて、次の日報告してというようなことをしていました。

何の議論をしていたかというと、地球環境の議論です。エビアンサミットのときに、小泉首相が地球観測サミットというのを提案しまして、その地球観測サミットのもとで、地球観測に関する政府間会合というのがつくられています。

そこで、地球全体のさまざまな環境の変化をモニタリングするシステム、GEOSSというんですけれども、それがつくられていまして、そのGEOSSのアジア太平洋地域の会議を日本が主催して、4年前からやっています。過去3回は日本でやったんですけれども、今回初めてインドネシアでやって、そこで気候変動と、水と、それから炭素の問題と、生物多様性、その4つのセッションで、これからどういう調査をしていったらいいだろう、どうやったらこの環境問題をとめられるだろうという議論をアジアの人たちと3日間やっていました。

そのような仕事もしておりますので、そういう経験から、少し環境問題についてのおさらいをして、地方から何ができるか、1人1人に何ができるかということを、問題提起させていただきたいと思います。スライドをお願いします。

このスライドは、地球環境の変化を一番象徴しているかと私が思っているものです。1979年と2003年の北極の氷の様子を示したもので、ごらんになっていただくとわかるように、北極の氷が温暖化の影響で、どんどん溶けて、縮小していています。その結果、魚の魚場も大きく変わっていますし、シロクマの生息場所もどんどん減っている。

こういう地球環境の変化が地球全体で起きているわけです。皆さん、多分、午前中の話も聞かれたし、いろいろなところでこういう情報を持たれていると思いますけれども、こういう北極の氷がこれだけ溶けている、これが人間の影響だということを知って、こわいなど思っておられる方は、どのくらいいらっしゃるでしょうか。かなりいらっしゃいますね。

ここでもう一言違う側面から申し上げておきたいんですけれども、北極海の氷がもうちょっと溶けると、ヨーロッパとアラスカ、あるいは日本の間の海運が開ける。以前は北極海の海運が開けるまであと20年以上かかると言われていたんですけれども、最近では15年ぐらいで開けるかもしれないと言われています。ソマリア沖の海賊が横行しているところを通らなくても、船で荷物を運べるようになる。これによって莫大な経済的な利益が生じるんじゃないかと私は思っています。

このように寒いところが暖かくなるというのは、温暖化と言われると、こわいなど皆さん思うかもしれませんが、一方で暮らしやすくなるとか、あるいは新しく海運が開けるというようなプラスの面もあります。

環境問題にはさまざまな深刻な面がありまして、白山先生も、例えば珊瑚礁がほとんどなくなるかもしれないという予測をされました。珊瑚礁が全部なくなると、そこにたまっていた炭素が大气に出て温暖化の原因に、またなります。

ただ、珊瑚礁について、私は、予測はちょっと悲観的過ぎるかなと思っています。将来は、非常に不確定なところがありますので、さまざまな予測をしている中で、常に悲観的な予測を選択するんですね。悲観的なシナリオを考えておいて、そこまで悲観的でない事態が進行すれば、我々としては、もっと有効な対策を打っていけるんですけれども、楽観的な予測をしておいて、実はもっと珊瑚礁の減り方が激しかったとか、温度の上昇が激しかったということになると、手おくれになってしまいます。

環境問題に関する科学というのは、実証的な科学と少し違うところがありまして、実験室で実験して、白黒決着つけて、こちらだとわかった、それから対策を打とうというふうにすると手おくれになってしまう。

水俣病の問題なんかでもそうだったんですけれども、水俣病から我々が学んだのは、水銀が原因かどうかを科学的にはっきりさせてからでは、手おくれになってしまう。それで予防原則という考え方が確立されて、悲観的なシナリオも考えてみて、最も悲観的なシナリオの場合はこうなる、そこまでいなくても、こういう事態はこのくらいの可能性で起きるかもしれない。そういう少し予防的なシナリオを描いて、対策をとって、対策の効果をモニタリングしながら、次の対策を考えていく。これを順応管理と言っていますけれども、そういう考え方が環境学の分野では非常に大事だと思っています。

ただ、決して楽観はできません。北極の氷が溶けて、海運が開けるかもしれないというふうに、プラスの面があると申し上げましたけれども、一方で、例えば、森林に関しては、

これは、私がカンボジアで撮った写真ですけれども、こういう立派な熱帯林が次々に伐採されて、広大なゴム園に変わっている。その結果、熱帯の森林伐採によって1.5ペタグラム、15億トンぐらいの炭素が毎年放出されています。ただ、幸いなことに、地球全体の森林としては、まだ成長しています。切る速度よりも成長する速度のほうが速いので、吸っているほうが2.6というふうに、まだ上回っています。こういう点からしても、森林を増やしていくというのが、温暖化対策として、すごく有効な、あまりお金もかからないし、1人1人ができる手段、ということになります。

それから、海が26%吸っています。残念なことに、海のほうは、少し波が穏やかになってきて、それだけ炭素が溶け込む速度が遅くて、吸収の効率が落ちているというふうに言われています。

炭素だけが深刻なのじゃなくて、実は窒素というのがものすごく深刻です。昔は、お百姓さんが、私たちの排泄物を使ったりして、あるいは森の葉っぱを使って、堆肥をつくったりして肥料をつくっていたんですけれども、今は空気中から化学肥料としての窒素をつくって、使っています。これは、1860年と2000年でどのくらい畑への窒素の投入量が増えたかというのを色であらわしたものですけれども、これだけの窒素を人工的につくって農地に放り込んでいます。結果として、きれいだった湖が、富栄養化して、汚れています。これは上海の太湖の写真ですけれども、アオコが頻繁に発生し、上海市の水道がストップするというような事態が起きています。

ほかにも、先ほどもハチが減っているという話がありましたけれども、世界のサルの半分が絶滅危惧とか、アマゾンの樹木の3分の1が数十年先には滅ぶだろうという予測があります。日本の野生植物については、私たちがシミュレーションをやっていますけれども、向こう100年間で8%ぐらい滅ぶと予測され、24%が絶滅危惧種のリストに上がっています。それから、サンゴも、845種のうち704種が絶滅危惧、そのうち8%が白化の被害を受けている。あと、遺伝的な多様性という点では、穀物の多様性の75%が既に消失していると言われています。

そういう中で、ご存じのとおり、気候変動に関しては気候変動枠組条約、生物多様性に関しては生物多様性条約がリオサミットでつくられました。今年は生物多様性条約の第10回目の会議を10月に名古屋でやります。

そういう中で、日本は環境立国戦略というのをつくって、両方の問題に取り組んでいるんですけれども、この環境立国戦略のメッセージというのは、私は、非常によくできていると思っています。危機を、温暖化の危機と、資源浪費の危機と、生物多様性の危機の3つにまとめていて、それぞれに対応する社会目標として、低炭素社会、循環型社会、自然共生社会、この3つを提案しています。

低炭素社会にむけては、できるだけ炭酸ガスを出さないようにしよう。循環型社会にむ

けては、物を大切にしよう。自然共生社会に向けては、ここが少しわかりにくいと思われるかもしれませんが、いろんな生き物と一緒に暮らしていこうということです。今まではあまりほかの生き物のことも考えずに、どんどん、どんどん開発してきた。そのために生態系にいろんな被害を与えて、それで、私たちにとって困る事態がいろいろ起きている。生き物と一緒に暮らす社会をめざすことで、私たちにとっても困る事態を解決していけるだろう。

もともと、ここは日本の伝統的な思想の強みでもあると思うんですけど、草でも木でも仏様になるんだ、というような考え方が仏教の中にあります。実はそういう考え方というのは、もっと古くから日本に、アニミズムの時代からあるものです。実は世界中にそういう考え方はありますけれども、そういう考え方が日本の社会の中にかなり根づいていますので、競争よりも共生のほうがいいねと言ったら、多くの人が、そうだよねと賛成してくださるんですね。

自分たちのことだけを考えずに、みんなのことも考える、人間のことだけ考えずに、ほかの生き物たちのことも考えて暮らしていく、というような生き方が、実は地球環境を守っていく上でとても大事じゃないかと思っています。

そういうわけで、私が勤めている九州大学の伊都キャンパスでは、生物多様性保全事業というのをやっています。九州大学では、伊都キャンパスという新しいキャンパスをつくるに当たって、里山を開発して、山だったところ、丘だったところをちょっと平らにしなければいけない。そういう中で、何とか開発と生物多様性保全のバランスをとれないか、あるいは生き物たちとの共生をできないかと考えて、さまざまな対策をとっています。

具体的には、森林面積を減らさない、種の絶滅を起こさない。この考え方でスタートしたのが実は1997年ぐらいで、その後2002年でしたか、ノーネットロスという、——まさにこの考え方が国際的に提唱されて、今では生物多様性オフセットという国際的に非常に重要視される考え方になっていますけれども、そういうのを先取りするようなことをやってきました。

どうやって森を減らさずにやれるかというと、こういう重機を使って、森を1.4メートル四方のブロックに切り取って、新しくできた斜面に移植しました。このようなハイテクというか、重機を使った大がかりな森林移植のほかに、市民の方々と一緒になって、この会場にもひょっとしたら関係者の方がいらっしゃっているかと思いますが、福岡グリーンヘルパーの会の方々と協力して、子どもたちにキャンパスの中でドングリを拾ってもらって、2年ぐらい苗を育ててもらって、そのドングリの苗と一緒に植え戻すという形で、キャンパスの中で苗木を使った森づくりというのをやっています。

こういうことをやることで、単に木の苗木を植えるだけでなく、子どもたちの心の中に木を植えていこう、というような話をしながら、こういうことに取り組んでいます。

それから、学生たちにも呼びかけて、こういう森づくり、ドングリ拾いなんかに頑張ってもらっています。その学生たちが、地元の酒屋さん、浜地酒造さんと協力して九州大吟醸というお酒をつくっています。この九州大吟醸の売り上げの5%は、キャンパスの森づくりに還元されるということになっていまして、毎年、学生たちがそのお金を受け取って活動しています。

それで、飲めば飲むほど緑が増えますので、ぜひ、この九州大吟醸、よろしくごひいきに、お願いいたします。

最後に、私たちにできることは何だろうということを少し考えてみたいと思うんですけども、私が選んだ行動指針は、特に自然共生社会、生き物たちと一緒に暮らす社会ということを考えたものです。炭酸ガス、低炭素社会に関しては非常にわかりやすいですね。やっぱり炭酸ガスを出さないようにする、省エネの商品を使う、循環型についても、できるだけ資源を大切にします。すごくわかりやすいんですが、生物多様性について何ができるか。

まず、旬の食べ物を食べるというのが、私はとても大事だと思います。今、私たちの食卓に乗っている食べ物というのは、1年中同じものが食べられますね。それは、海外から運んできて、冷凍したりしているせいなんですけれども、私が大学のころは、ベッカーさんもそういう話をされたかもしれませんが、すべての食べ物が太陽エネルギーから来ているというふうに教わっていたんです。

ところが、実は、今や食卓の食事の中身をエネルギー換算すると半分以上は化石燃料なんです。私たちは化石燃料を食って暮らしているんです。その化石燃料はどこから来ているかというのを詳しく調べてみると、実は輸送と貯蔵というのがものすごく多いんです。

肉なんかも、アメリカから運んできたら、店先に並ぶまでずっと冷凍してなきゃいけないんです。そこで出る炭酸ガスの排出量というのは結構なものになります。

そうすると、旬のものを食べれば、それだけコストがかからないし、それから、できるだけ輸入食品に頼らないということになって、食料の自給率の改善にもつながるし、やっぱり季節感というのが出てきますね。そもそも生き物が、いろんな季節にいろんな生き物がいて、そういう多様な生き物を利用することで人間がここまでやってこれたという面があるんですけれども。技術の進歩によって、特定少数の、特においしい、エネルギーの高い食糧を窒素肥料をぶち込んでどんどんつくれるようになったので、多様性ということをついつい忘れがちになっちゃっているんですけれども。季節感のある旬の——特に魚とか、福岡はいろんな魚が入りますので、アラカブのおいしい季節になったとか、キスがよくなるようになったとか、そういうのを感じながら暮らすというのは、生活の質という点でもとても豊かな暮らしができるんじゃないかと思います。

あと、いろんな生き物を知ることがとても大事で、春になったなと思うだけでなく、イヌノフグリが咲いたなとか。秋になったなと思うだけでなく、あつ、ジョウビタキがやってきたなとか。そういうふうにして暮らせると、とても暮らしは豊かになると思いますし、それがやっぱり生物多様性を守ることに繋がっていくと思います。

どんな手段でも結構ですので、自分に合ったやり方で生き物に親しんでいただければと思います。

それから、やっぱり子どもたちが、あまりに自然から離れた環境で育つようになっているのは、どう考えても子どもたちの成長にとってよくないと思います。ですから、ぜひ、九大のドングリ拾いだけでなく、いろんなところに子どもたちと一緒に出かけていただいて、子どもたちが自然の中でいろいろな生き物に触れて、本来の人間らしい成長をできるようにしていただきたい。

最後に、実は、これが私としては、大きな問題を解決していく上では非常に有効だろうと思っているんですけども、環境保全に貢献している商品や企業を消費者が選択する、皆さんが選ぶ、これが実は多くの問題を解決する手がかりになると思います。企業のほうも、生物多様性保全とか、あるいは地球環境を守ることに積極的に貢献することが外に見えて、消費者がそれを選ぶようになれば、そういう活動をするのが企業価値を高めることにつながるわけですね。

先ほど九州大吟醸のささやかな例を出しましたがけれども、今や、今年名古屋で生物多様性条約第10回をやることもあって、いろんな企業が生物多様性を守る取り組みに積極的になっています。ですから、ここで特定の企業を上げると、ちょっとえこひいきになるかもしれないので、皆さん、ぜひ新聞の広告とかも注目していただいて、あつ、この企業頑張っているな、じゃあ、この企業の商品をもうちょっと買ってあげようというように行動されることが、地球環境問題の、さまざまな問題を確実に解決していくことにつながるんじゃないかなと思っています。

私からの問題提起は以上です。(拍手)

時 任 どうもありがとうございました。環境生物の面から、社会活動に向けてどのような考えを持ったらいいかという問題提起かと思います。

こういうことを総合して森先生にお伺いいたします。環境問題と経済問題というのは、今非常に大事な問題だと思うんですが、それらに対処する方向というのは、いくつか別のやり方というのがあるんでしょうか。それとも、1つの方向に向かっていくべきなんでしょうか。

森 それは非常に難しい問題です。僕の守備範囲でなくて、なかなか答えられないんですけど。集積、集積と言っていますけれども、むしろそれは環境を破壊することに繋がることもあります。そのトレードオフというのは経済学の中でもまだまだ未解で、明確な答えを与えるすべがないのが正直なところです。

環境と経済学ということでは、私のほうからはお話しし難いのですが、皆さんと違った視点でということで、九州に視点を当てた、私の講演の延長線上での話を、もう少し続けさせて頂こうと思います。

実際、経済成長すれば環境はどうなるのか、というのは実に難しい問題で、環境と共生しながら経済成長できるかどうかというのは、また、これはオープンクエスチョンであるわけですが、地方がこれからどうやって発展していけるかという視点で、ちょっと今のいただいた質問とは乖離しますけれども、少しお話ししたいと思います。

私の話の中では、地域、都市の発展というのは、——地域の発展というのは、いわゆる第一の地域性という地域の固有の特性と、第二の地域性という、集積の連鎖、つまり、他の地域との依存関係で決まる特性との相互作用で決まるんだという話をしました。そして、第一の地域性というのは、重要な起爆剤になるというケースが往々にしてあるのだという話をしました。

九州というのは、日本の地方の中でも、とりわけ第一の地域性という、固有の有意性が非常に大きい地域だと思います。まず、九州がどのくらい豊かな地域性を持っているのかということをお話ししまして、じゃあ、それを生かすための第二の地域性を生かす方法によって、実際に集積を引き寄せる方法というのは一体どんなことか、という話に続けたいと思います。

まず、第一の地域性として、豊かな農林水産資源があります。例えば、福岡以外の全県で、食料自給率は、生産額ベースですと100%を超えているんですね。

2つ目は、一村一品運動の発祥の地であるという特性です。一村一品運動は、まさに地域の個性をうまく開発する、引き出す試みなわけで、これは、私が話しました都市という地域単位では漏れてしまうような小さい村であるとか町であるとかで、非常にうまく機能している事例であります。皆さんは、その発祥地ですから、よくご存じだと思うんですが、一村一品運動は、アフリカやアジアの発展途上国に対するODAでも、主たる開発政策のツールとして使われているぐらいなんですね。そういったノウハウを持っているということが、まず2つ目の強みです。

3つ目は、この先10年、20年で、まさに九州が発展するための起爆剤になり得る特性で——環境が悪くなる可能性をもちろん秘めているんですが——東アジアと日本の中間地点としての地の利です。東アジアの中でも特に発展著しい地域、中国の沿岸部であるとか、台湾、韓国といったところと、日本を含む圏域の、中心であるという位置づけなんですね。これは、日本の地方の中でも非常に特殊な、優位な地域性であると考えます。これを生かすも殺すも、第二の地域性をうまく生かせるかにかかっています。東アジアは、GDPシェアで見ると、これは2005年の時点ですが、EUとNAFTAが30%程度持っていますが、東アジアも20%を占めています。ここ数年で、EUやNAFTAと

同じレベルに到達するであろうと思われます。その中で日本は50%を持っているということです。

東アジアというのは、どんどん一体化しています。どのぐらい経済的に一体感があるかという指標として域内の貿易シェア、——全ての貿易の中で域内貿易が占めるシェア——を使いますが、これが、今2008年で NAFTA を抜いて、60%を超えて、EU に近づいている状態です。ということで、昔はばらばらだった東アジアが、経済圏としての一体感を持ってきているということです。この中で、九州の意味というのは、どんどん変わってきていると思うのです。先ほど、日本は東アジアで50%だと言いましたけれども、日本の中の地域というのは、ただの日本の地方と思っても、意外に大きいのです。これは、先ほどのこの図を、日本を地域に分けたものですが、東京、大阪、名古屋、九州とありますが、東京は、イタリアと同程度の規模です。

九州も、この上の数字がアジアのシェアで、下が全世界のシェアですが、ベルギーと同じ規模ですね。あとは、アジアの中ですと台湾を凌ぐレベルになっていて、日本の地方でありながら国際的には、国と同等な経済規模を持っているということです。

九州の地の利を生かすために、第二の地域性が重要です。これが環境問題にどう影響するかは、難しい問題ですが、——私の講演の中では、九州では秩序が見えないと言いましたが、結局のところは、これは第二の地域性を生かし切れていないということのひとつの現れだと思われます。九州単位での広域連携というのは、従来からされていると思うんですが、やり方、ここで言うところの連携とは、考え方が違うと思うのです。

まず、集積の影響範囲というのは、市区町村ではなくて都市ということで、まず、都市レベルで考える必要があるということがあります。次に、集積の連鎖ですが、集積の連鎖の影響範囲で連携することが重要になります。都道府県より通常はうんと大きい経済圏——九州の場合は、私の例ですと中国の一部も含む地域でした——での連携です。規模の経済であるとか、集積の経済を生かそうと思ったら、空港の例の様に、行政区を越える規模が効率的になる場合は多くあり、経済学的に意味のある地域単位で連携するという必要が出てくるわけです。

ここで大事なことは、横並びの連携ではなくて、空間的な集中をも許容するような連携です。空港はいい例なのですが、集中を許すことで問題が出てくるとすれば行政地域間の平等性ですが、それは、分配のメカニズムを工夫することで解消すべきです。第二の地域性を生かす連携を考慮した上で、第一の地域性によって集積を引き寄せる政策を打つ筋書きを書けないか、ということが、私のお話からの九州経済への応用ということになります。

時 任 ベッカー先生、簡単にコメントを。

ベッカー 簡単に付け加えさせていただくと、毎日、我々は何かを購入します。その買い物自体が、

いかなる選挙よりも大きな影響力を持っているのです。買い物をするときに我々は、あるものを選ぶことで、農業、企業などの生産者に、「もっと生産しろ」という強いメッセージを送ります。もし、消費者があるものを買うのをやめれば、企業も農業もあるものを生産するのをやめようということになります。選挙は年に1度あるかないかぐらいのものですが、日頃の消費者の買い物によって、我々の近未来が左右されるのです。その意味で、我々の日頃の行動は、経済や環境問題に直接影響しているように思います。

時 任 メッセージ性を込めたテクノロジーでも商品などでも、ちゃんと波及効果を見込んで作れば、たぶん世界を変えられるんじゃないでしょうか。

そういう意味で、最後空港の話も出しましたが、小林さんに伺いたいんですが、社会の話題というのは、マスコミは非常に断片的に取り上げますね。でも、今日のディスカッションでいろんな分野の話を聞いていますと、学術的な視点もあれば、非常に知的な話もあるんですけど、こういう題材を記事として取り上げる場合は、マスコミ側としては、興味ある話題を単純に盛り上げていきたいのか、それとも何かマスコミとしても、記事全体としてメッセージ性を持って、将来に明るい展望が開けるような、何かそういう貢献をしているかというようなことは考えておられるんですか。

小 林 今のご質問は、編長局長にさせていただきたいというような質問でございましたけれども、今日の朝からの講演をお聞きしまして、大学の研究がアクチュアリーになっているといいますか、我々人間が今直面している課題に非常に接近したところで研究活動なさっているということがよく分かりました。

今の質問ですけれども、もちろん、今、世の中でどういう問題があって、何が求められているかということは、どこの新聞も、当然、意識して新聞をつくっていると思います。それとともに、面白い話題というのを追求するのも新聞でありますから、両方やっていることだと思いますけれどもね。

時 任 ただ、なかなか、科学技術の表と裏で、いい面はなかなか報道されずに、悪いときにはこぞって取り上げられて、非常に苦しいときがあるんですね。私は化学なので、——化学というのは、本当は身の周り全部に関わっているんです。我々は常日頃、非常にその恩恵を受けているにもかかわらず、恩恵を受けるのは当たり前であって、問題を起こすと、ここが悪い、あそこが悪いと。今度のトヨタの件もそうでしょうけど、あれほど、ハイブリッドのいい車だと思っていた人たちが、ちょっとブレーキが止まらなると大騒ぎになっています。車が正常に止まらなると人命にかかわるので重要な問題なんですけど、その記事としての価値と、もうちょっと高い意識から原因と対策を論じるとか、——何かいつも、世論を導くようなマスコミのあり方も、多少はあってほしいなと思うときがあるんですけども、どうなんでしょうか。

小 林 それは肝に銘じます。そういうご批判を受けたということを会社に帰って伝えま

して、今後の紙面づくりに生かしたいと思います。

時 任 そんな大それたことをお願いしたつもりではございません。ありがとうございます。

さて講演者の皆様、今日は、それぞれのご専門の分野でいろんな、問題提起なり、活動報告をしてくださったと思うんですが、午後のサブテーマ——「地方と世界、ローカルとグローバル」という対比ができるかもしれませんけれども、そういうものについていま一度、パネリストとして午後の部にも参加していただいていますので、一方ずつ、またお話を伺ってみたいと思います。まず寶先生には、ちょっと会場の参加者の方からの質問を追加させていただきます。「防災」の「防」の字と関連する言葉で、「砂防」とかいう言葉がありますが、そういうのは、水だけじゃなくて、砂というのは、どういうところで災害と関係しているんでしょうか、という質問もあったんですが。

寶 砂が災害とどう関係しているか？

時 任 先生のお話とか仕事との関連で答えいただければと思います。

寶 もちろん、砂自体が山から出てきて、家や建物を壊すこともありますし、貯水池を埋めてしまうこともあります。それから、また、貯水池そのものがその砂をとめて、海岸のほうの砂がなくなると。これはよく知られていることですが、そういうこともありますし、また、実際にはそういう影響もありますけれども、川から砂を取ることによって、それを売って生計を立てている人もいるわけで、そういったことがまた環境を悪くしている、あるいは、川の防災面からの危うさを高めているというようなところもあるんですね。

時 任 ちょっと細かい質問を1つ、防災という分野に興味を持ってほしかったので取り上げさせてもらいました。

今日、全体を通じて、このパネルディスカッションで、寶先生、何か感じられたことでも、まとめていただけたらと思うんですけど、どんなふうに……。

寶 今日、最後の白山先生のご講演では、海の生物でまだ未発見のものがたくさんあるというお話でしたけれども、それは生物多様性ということだと思います。地方の知恵というのは、地方の生活ということだろうと思いますけれども、生活も多様性がある、あるいは文化も多様性がある。文化多様性というのは、よく言われるんですけど、まだ、我々が知らない地方の知恵がいっぱいあるんじゃないかなと思うわけです。ただ、それが知られていないだけで。

ですから、そういう地方の知恵を全国に生かす、それから、日本の知恵を世界に生かす、これはベッカーさんからもお話がありましたけど、日本の知恵を世界に生かすということで、ひょっとしたら、我々があまり知らない、付き合いの少ない世界の地方で、すごくいいことをやっているかもしれないわけですね。

そういう生活多様性とか文化多様性の面でも、いろんないいものがあるんだろうと思うんですけども、そういったものも絶滅しつつあるということですね。生活の知恵がどんどんなくなっていっていると。特に日本の社会はそうだと思いますけれども、昔の知恵がなくなっていっていると。

だから、そういう知恵が絶滅しようとしているのをどうするのかということは大変重要ですね。

時 任 だから、有用な情報を共有するのも大事だけれども、あまり生活や文化が画一的にならない、という、つまり多様性をキープする、という形ですか。

寶 そうですね。ですから、だけれども、なかなか、研究として難しいところですね。なくなりつつある世の中の慣習や文化や、そういったものをいかにつなぎとめていくかということとは、我々自身が日常生活で、本当はやっていかないといけないことなので。そういったところが、戦後の経済成長から今日に至るまでの間に、かなりのものを失ってしまったというところがあると思いますが、そういったものをもう一度見直していくということによって、災害に対する、あるいは環境に対する今後の危機を救うことになっていくんじゃないかなと思いますので。そういったことは実は——大変難しいんですね。生物ですと、実際、生物という実体がいるわけですけども、文化とか知恵とかいうものは、形（実体）がないものですから忘れられてしまって、100年前、200年前、1000年前、人々がどう生活していたかということは、そのときの絵でも残っていれば、写真でも残っていれば思い出せるんですけども、文書もない、絵もない、写真もないということになりますと、どんどん滅びていきますから。ただ、幸い現代の我々は、それを記録できるメディアをたくさん持っているわけで、そういったものをいかに、全世界から、地方から、拾い上げていって、そして生かしていくかということは、大変大事なんじゃないでしょうかね。

時 任 寶先生、どうもありがとうございました。

ベッカー先生、もう一度、今日いろんな視点でお話くださったことをまとめてほしいと思います。その前に、1つベッカー先生宛の質問が書かれていたのを今見ていたので伺います。ベッカー先生は、今日お話しいただいたように、外国人でありながら日本のことを詳しくご存知で、いろんな考えをお持ちなんですけど、それをどうやって世界に発信しておられるんですか、という質問があったんですけど。

ベッカー 日本では日本語で、外国では英語で、同じようなメッセージを伝え続ける他ありません。出版、放送、国際会議等で活動していますが、1人の声だけでは限界があります。そこで、ぜひ本会場に来られている読売新聞や、皆さんの積極的な言動とそれを発信するメディアの力が必要となってくるのです。結局、地球を護る生き方の改革は、みんなが認識していても、口に出して行動を起こさなければ起こらないのです。

さきほど明治維新の比喻が使われたと思いますが、明治維新は、単に幾人かの

知識人が京都や東京に行って政府を変えたという話ではありません。それが国民にまで伝わって、国民に支えられて、日本全体が変わったと思うのです。

また、九州で何ができるのかということで、私は予言者ではないのでわかりませんが、アメリカ西部のカリフォルニアと日本の西部の九州を例にとれば、どちらも大変温暖で、気候的に恵まれています。ところが、アメリカ政府は有機農法を推進していません。ソーラーエネルギーは多少なりとも推進していますが、大した働きかけはしていないのが現状です。低燃費車両などは、中央政府やそれぞれ GM (General Motors) のロビーなどもあって全然推進されていません。けれど、カリフォルニアでは、独自に有機農法やソーラーパネルを開発しようという流れに変わってきています。それが徐々に全米に広がり、有機農法は良いではないか、またカリフォルニアの食物も信頼できる、というようになってきていると思います。したがって、中央政府の要請ばかりを待っていたのでは発展しませんし、東京の真似をしても、九州の独自性や特徴は無くなってしまうと思います。九州には、九州なりの資源（地熱、海、高原、鉱物）などが有り、また伝統的な知恵や将来に生かせるものを自分で開発し、皆さんの声、皆さんの出版、皆さんの講演などで発信していけば、国内外に広がっていくのではないのでしょうか。

時 任 ベッカー先生、どうもありがとうございます。

いろんな分野から見て、物事によって温度差があるのかもしれませんが、多分、そういう正しいメッセージを込めた形で発展を目指すことが大事なんだろうなというふうに思いました。

さて、矢原先生、午前の部はお聞きになってないということなんですが、今のやりとりを聞かれて、何か思われることはありますか。

矢 原 まず、都市に集積すると環境が悪くなるんじゃないかみたいと思われるかもしれませんが、実は都市の発展とともに、さまざまな環境問題が解決している面があります。都市というのは、非常に高度に組織された、下水道とかも完備して、環境に対する負荷を効率的に減らしたシステムです。

いろんな国の農業から工業、商業という経済発展の段階を見ると、大体どの国でも、1 回森をどんどん切ってしまって、かなり環境破壊をして、農業から工業、商業に移るにしたがって、都市にどんどん人間が集積している。その結果、1 回森を切ってしまったところが、また森に戻っています。これは世界的な傾向です。日本はその最先端です。

ただし日本の場合、中山間地問題というのが発生していて、本当に村が絶滅している。今まで人が住んでいたところに人が住まなくなると、そうすると、そこに行くための道路とか電気とか、インフラがあったのが維持できなくなる。上流でどんどん、どんどん村が消えると上流の管理ができなくなって、一体どうするかという問題が起きてい

るわけです。そこはちょっと失敗しているところがあるんですね。高度成長時代に、もうちょっと長期的に考えて、もう1回森が戻ってくるときに、ダムとかコンクリートとか、よけいなものを残さないような形のやり方をしておけば、再生するコストとか、あるいは維持するコストがもっと少なくて済んだと思うんです。

中国とか東南アジアの、今、短期的な経済成長ばかりに目が行っているところに、我々が経験者としてちゃんと教訓を伝える必要があります。必ず自然を大切にする時代が来ますから、そういうときに、再生とかにあまり大きなコストがかからないように、今の段階から環境保全、あるいは生物多様性保全と開発をバランスさせたやり方をとっていくほうが良い。そのための開発援助を日本が率先してやる、というようなことが、とても大事じゃないかなと思っています。

ですから、日本はやっぱり世界の先進国でして、中山間地問題というのを経験しているというのは——間違いなく世界の中で日本が初めて直面している大きな課題で、これをどう解決するかというのは、すごく知恵を絞らなきゃいけないけれども、これが解決できれば、地球環境全体にとって、地球社会全体にとって、やっぱり新しい未来が開けてくるんだらうと思います。

そういう点では、地方の、あまり集積はしてないけれども、まだ個性を残しているところが、いかに自分たちの価値を見出して次の時代をつくれるかが重要です。そこに万能の処方箋はないと思いますけれども、他の地方のいろんなところを見て、自分の地方の価値を知ることが大事じゃないかなと思っています。

生物多様性に関して言うと、大体、地元の人には地元の自然を大事にしないんです。何でかというと、小さいところから見なれているから。例えば、今津なんかにしゅっちゅうやってくるクロツラヘラサギというのが世界に1000羽ぐらいしかいなくて、中国の人や韓国の人、一生懸命になって保全しているというようなことをほとんど知らないで、田んぼに来て何か荒らすばかりの悪い鳥だというふうに思っちゃう。でも、そのクロツラヘラサギを見るために、わざわざ韓国や中国から来ている人もいます。

そういう地元のよさというのは、なかなか地元だけではわからないので、それはやっぱり、いろんな外の人意見を聞いたり、外を見たりして、自分たちの地方が持っている地方の価値を再確認して、それを生かした地域づくりをしていく、まちづくり、あるいは都市づくりをしていく、というのがとても大事じゃないかなと思っています。

時 任 やっぱり、文明の発展の後にまた再生を意識したような考えを持ち込む、というのは新しい考えなんでしょうね。

このような話題に関連する質問として一ついただいているのは、「四大文明を例に挙げると、人間が集まって活動し文明が繁栄した後に、いずれも大概砂漠化して滅んでいる、そういうものについて、なんで人間は対策を考えてこなかったんだらう？」とい

う質問です。これは、ベッカー先生、實先生に宛てた質問とされているんですけども、いかがでしょうか。そういう問題に対して、現代では、先生方がおっしゃったように、色々な視点からの考え方を混ぜて正しい対処法を見つけながらやっていく学問が芽生えつつあるんでしょうけど、当時は将来予測をする知識もなかったから、多分ありとあらゆる環境を破壊して、その結果人がそこに住めなくなったんだと思うんです。

ベッカー先生、何かそういう文明の発達と衰退とか、そういう過去の歴史が、何か人間に教えるものってあるんですか。

ベッカー ご指摘のとおり、教訓にはできていません。しかし4つの大文明が発展し、最終的に水没したからといって、我々の文明も水没するとは言えません。むしろ前もって問題に気づき、自らの将来を自らの手で選択したという意識こそが重要なのです。それに基づいて、我々の買い物の仕方、消費の仕方、あるいは交流の仕方が変われば、水没せずに新たな文明を築くことが可能であると思います。

時 任 實先生、そういう都市のつくり方とか、そういうのでも参考になるのはあるんですか。歴史から学ぶというのはあるんですか。

實 そうですね。やはり古代ですと、住みやすいところに住んで文明が発達したんだと思いますよね、当然ね。ですから、ただ、近代・現代では、住みにくいところでも住みやすくして、そして住んでいるわけですね。洪水の氾濫原に、日本の場合ですと、たくさん人が住んでいる。例えばですね。これは、本来は当然あふれても仕方がないような川のところに農地をつくるために堤防をつくったと。堤防をつくったのは、どっちかという、治水のためではなくて、農地をつくるために、堤防をつくったという歴史もあるんです。

ですから、そういうところに住むためには、やっぱり環境に負荷をかけたり、あるいはよけいなエネルギーを使わないと仕方がないわけですね。住みにくいところに住もうとするわけですから。ですから、狭い国土で、便利なところで、少々災害の危険があっても、低地であっても、駅に近い、地価が安い、じゃそこに住もうというふうなことで、どんどん、どんどん都市化してきているところがあるわけですけども、もう少し、そういうところには住まないようにすれば、山から人がそれだけ出てこなかったかもしれないし。先ほど矢原さんがおっしゃったように。

ですから、無理をして、そういう生活をしていることによって、いろんな弊害が出てきていると。アメリカなんかもそうですよね。機械化して、ものすごい機械を使って何かをする、エネルギーを使って何かをする、と。そうして経済を高めていっているわけですけども。

アメリカのスポーツも、大体よく道具を使うんです。アメリカンフットボール、アイスホッケー、野球などお金のかかるスポーツはアメリカのスポーツ。

時 任 わかりました。

實

あと私から個人的に質問なんですが、日本は災害の、——非常に小さな国土に、いろんなタイプの災害があるということで、例えば防災研究も實先生たちがやっておられるように、いろんな分野で先進的な研究が進んでいると思います。こういう優れたノウハウというのは、世界中からある程度ニーズがあるというか、いろいろ乞われて教えるとか、そういうことはありますか。その結果「世界を変える」というふうになれば一番いいんでしょうけれども。そういう研究協力みたいなものはやられているんですか。ここ10年ぐらい、といいますか、日本は1990年代初頭に国連の国際防災の10年（IDNDR）という、——1990年代は自然災害を防ぎましょうということで——世界的な共同事業をやったんですけれども。そういうこともあって2005年からは、今度は国連防災世界会議を神戸でやって、また、さらに兵庫フレームワークフォーアクション（HFA）ということで、兵庫行動枠組というのも設定して、政府も頑張っておりますけれども、私たち防災研究所も1951年にできまして、もう60年近い歴史があります。

それで、私たちのところを卒業していった学生さんたちも、各国で重要なポストを占めたりしています。それから、やはりこのグローバルな、防災の問題というのは、世界各国で注目されだして、それで世界科学会議でも、総合防災に関する国際的研究計画が2年前から立ち上がりまして、学術学議でも、防災のことをもっとやっていこうというふうなことになっておりますし、世界的なそういう傾向がありますね。

やはり、これは、全世界で取り組んでいくべき課題であるというふうなことです。

時 任

この間のチリの地震と津波のようなものもありますね。インド洋大津波もアフリカまで影響がありましたし、このような大災害に関しては、やっぱりいろんな国を巻き込んだ形で一緒に考えるべき問題なのかなというふうに思います。

そういういろんな活動がある中で、今日は、文系、理系、両方の分野の先生方がおいでなんですが、森先生は、どんなふうな、今日のまとめの感想というか、いろんな話も総合して結構ですけども、お持ちでしょうか。

森

今日は、キーワードとして多様性というのがあったと思うんですけども、私は集積、集積と言っていますが、やっぱり集積したとしても、ずうっと同じところには、多様性がどんどん、どんどんなくなっていくんですね。同じところにいて、東京は大きいですけども、そこでいろんなコミュニケーションが生まれて、いろんな新しいアイディアが生まれるんですけども。そうすると、だんだん同じ人と会っていると知識が飽和してくるんですね。

会っていていいことがあるというのは、お互いに共有や知識を持ちながら、差別化した知識を持っているから会っている意味があるんですけど、ずうっと同じところに集まっていると、みんな同じような感じになってくる。

今日、すごく感じたのは、ここは、附置研・センター群のシンポジウムなので、いろ

んな研究所・センターから集まってきた方がしゃべる。いろんなお話を聞く中で、それぞれがそれぞれの研究所で、同業者とコミュニケーションをとりながら研究をしているわけですけど、そこはそこで多様性があるんですけども、ここへ来て気づいたところは、そこから出ると、またものすごく大きな多様性がありまして、また新たな知見を得られる。

また、京都ではなく、東京でもなく、福岡に来るということで、また東京や京都では得られなかった新しい視点を得られるということで、いろんな意味で多様性という言葉が今日使われましたけれども、そういう多様性の重要性をすごく感じました。

時 任 わかりました。

ところで小林さんは、研究者ではない立場から今日一日シンポジウムでの講演やディスカッションを聞かれて、どんな感想をお持ちですか。

小 林 さっきから私は、場違いなところにいるなという疎外感といいますか、孤独感を感じておったんですけども。先生方のお話を聞いて感心して、時任先生におしかりを受けただけで帰るというのでは、おまえは何しに来たんだということになりましようから、ちょっと話をさせていただきます。先ほど矢原先生がドングリの森の話をされました。それで思い出したんですが、宮崎県に綾町という町がある、——アヤマチというんでしょうか。

時 任 アヤチョウです。私、宮崎出身です。

小 林 ああ、そうですか。そこに郷田さんという町長さんがいらっしゃいました。この方は1966年から6期ほど町長をなさったんですけど、まさにこの方は地方から日本を変えた人だということだと思えます。

当時は住宅を増やさなければいけないということで、原始林を伐採して、杉、桧に植えかえるということを全国的に林野庁がやっていたわけですけども、その綾町には照葉樹林が残ってしまして。これは見事なものらしいです、私は行ったことないんですが。

林野庁はそれを伐るというんですね、植林するんだと。それに対して断固、郷田町長は反対するんです。役場の職員が、「それは杉、桧を植えたほうがもうかるに決まっている」といって反対したらしいんですけどもね。町長は、「いや、違うんだ」と。「空気がきれいで、きれいな森がある、そういうものを求める時代が来るんだ」と。半世紀ほど前に、そういう洞察をなさまして、断固、伐採に反対されるんです。

最終的に林野庁は屈服しまして、屈服というよりは、むしろ教化されるんですね。教えられるんです。照葉樹林をむしろ増やす、既に伐採されている、分断されている、そういう部分にドングリとかを植えて照葉樹林を復活しようという、照葉樹林プロジェクトというのが、林野庁も一緒になって、今も続けられているんです。

これなんか地方から日本を変えた例ではなかならうかと思います。

ついでに、郷土自慢を、京都からいらっしゃった先生の前でしたいと思いますけれ

ども、アイガモ農法の古野さんという方がいらっしゃいます。「未来の食卓」というフランスのドキュメンタリー映画が話題になりましたけれども、これはこわい映画ですね。農薬を使って、どれだけ我々の食生活が危うくなっているかということをドキュメンタリーで報告している。その映画の監督が、次回の作品をつくるために、古野さんのところに、去年と今年の2回にわたって取材に来ているんです。アイガモ農法をやっている古野さんは世界から注目されていて、いわゆる賢人会議と言われているダボス会議に2002年ごろからずっと招かれています。ちょっと自慢ばかりしましたがけれども。

それともう1つ、せっかく「地方から日本（世界）を変える」という、このパネルディスカッションのテーマがありますので、それに引きつけて、多少私が考えていることを述べさせていただきたいと思います。まず、「地方から」というときの地方というのは一体何なのかという概念規定がなされなきゃならないと思います。今日のシンポジウムには、まず、大きなテーマとして、「グローバル社会に生きる」というのがあるわけですから、グローバルな社会というものがあってその中で地方から変えるということになると、グローバリズム、グローバルな価値観、そういったものを相対化するといいますか、あるいは対立することにもなるかもしれませんが、そればかりじゃないよという、そういうものを提示する、そういう可能性といいますか、そういう力が地方にはあるんだと。そういう意味での地方だと思うんですね。

そうすると、この地方は、農村というべきなのか、農漁村というべきなのか、あるいは村というべきなのか、そういうものではないかなと思います。

すると、村から世界を変えると、こうなるわけですが、中谷健太郎さんという、これまた地方から日本を変えた1人だと思います。由布院の旅館の経営者で、地域おこしのリーダーでもありまして、今や日本の旅館業は由布院を規範にしているというか、モデルにしているというぐらいですから、本当に日本を変えた人であるわけです。

この中谷さんが10年ほど前に出された本の中で、地方は、本の中では村と言っていますけれども、村はいろんなものをなくしてしまった。先ほどどなたか先生が、昔の知恵が絶滅しているというようなことをおっしゃいました。本当に村が、村あるいは地方が、だから地方なんだ、だから村なんだという、そういう村性といいますかね、村の持っている価値、そういったものをどんどん失っている。だから、これからの10年、自分は、村が失ったものを回復するための仕事をするんだ、ということを書かれています。それがちょうど10年ほど前です。

10年たって、由布院ではいくらか取り戻せたかもしれませんが、しかし、日本国中、見渡すと、恐らくさらに失ったろうと思います。だから、今、村というか、地方というのは、地方から世界を変えるどころか、グローバリズムに押しまわられて村自体が存続し得なくなっている、と、そういう状態にあるんじゃないかなと思うんです。

地方を変える。地方から日本、世界を変える。それは結構ですけども、まず、我々が、——我々といっても、ここにいらっしゃる方は村の人間じゃない、街の人間ということになるかもしれませんけれども、しかし、我々のふるさととは村でございますから、もとをただせば村から出てきた百姓のせがれや娘ですから、——そういう村が持っている可能性といいますか、潜在的な価値みたいなものをもう一度見直してみようと。絶滅危惧種みたいなものをリストアップして、村の村的なよさ、それを1つ1つ再発見して残す。残しておけば、いつか原始の種子が、大事なときに可能性を芽吹くように、残してさえおけば、いつかオルタナティブ、人間のもう1つのあり方、社会のもう1つのあり方につなげるような、そういった可能性を生む。そういう期待が持てるわけです。

皆さん、時には、いや、しばしばふるさとにお帰りになって、自分のふるさとのよさ、こういうとこだよな、こういうところをおれたちは忘れてきたんだなというようなものを拾い上げて大事にしていこうと、そういうことをお願いして、といいますか、提案して、私の話を終わらせていただきたいと思います。

時 任 小林さん、どうもありがとうございました。

また別の意味での、多様性を保ちたいということだと思います。最近、平成の大合併で町や市が減ってしまって云々という記事が新聞に載っていました。歴史的な意味を失った意味のない行政区域がいっぱいできて、何がオリジナリティなのかかわからないような世の中になっているのかもしれない。

さて会場から頂いた質問の中に、もう1つ、京都大学のシンポジウムということ意識されての質問だったと思うんですけど、矢原先生に、「東京大学、京都大学、九州大学の違いはどうでしょう」という質問があったんですが、各大学の学生さんを見てでもいいですし、先生が体験されたご自分の経験でもいいですけど、土地柄とか、大学の校風とか、その辺を少しコメントしていただけないか。今日のテーマとは全く関係なくて結構です。

矢 原 3大学経験したので、3大学の気風の違いというのはよく感じているんですけども、京大は、とにかくアンチ東大というのがあって、何かにつけ、とにかく批判をする、とにかくつむじ曲がりて人と違うことを考える、人と同じだというのが恥ずかしいことだというような大学だと思います。

私が大学に入ったときなんか、「あんな、矢原。大学というのは自分で勉強するものや、授業なんか出るもん違うで」とか言われたんで、最初の1か月、私、全然授業に出なかったんですけども、そういう自由というか、踏み外したというか、とにかくそういういいかげんところが魅力で、そういう中からすごく独創的なのが生まれてくるんだと思いますけど。

東大は、やっぱり優等生の大学で、東大の新生に、どうして東大に来たのといったら、とにかく東大に入れば、その先、進路が自由に考えられる。ほかの大学だと、

学科とか選ばなきゃいけないけど、東大というのは、理系だと、理Ⅰ、理Ⅱ、理Ⅲという区別はありますが、まず東大に入ってしまうと、そのあとで教養課程の点数次第で自分の行きたいところへ行ける。だから、大学を選ぶときに、とにかく大学を選んで、その先の進路はその先考える。そういう大学ですね。

それと、やっぱり官僚になる人が多い。ピラミッドの頂点である。誇りもあるし、能力もあるし、そういう優秀な人たちが集まっている大学で、そのよさも欠点もあるなどと思います。

九大は、よくも悪くも九州の一番の大学で、京大生ほどぎすぎすしてないというか、何か向こうを張ってないというか、つむじ曲がりでないというか、人柄としては、とてもよくて、安心して社会に出せる。そういう点では、企業の方とか、行政の方には、九大生はとてもお勧めだと思います。一方で、しっかり能力もあるし、ただ、九州で、例えば、福岡で地元だから九大に行こうかなというような選択をしている人が多いので、能力はあっても、もう1つ高いところを目指そうという、ちょっと突き抜けたところがほしいなど、平均的には思います。

もちろん、今の3つ申し上げたのは、全部平均的な個性であって、東大にもすごく変わったつむじ曲がりの人はいますし、九大にも、もちろんそういう人はいますし、逆に京大だって、すごく保守的な人もいますし、多様性というのは、どの大学にもあって、そういう多様性を保ちながら、一方で、大学の学風とか個性とかいうのがあると思います。

これからの時代は、多分、大学の個性とか学風とかいうのに加えて、もう少し学問分野としての個性がよくも悪くも求められている時代かな。だから、九大に行けば伊都キャンパスで、生物多様性保全事業とかやってて、そういうことに何か関われそうだとか、そういうことが大学の魅力になっていく時代じゃないかなというふうに思っています。

あと、最後に、先ほど四大文明が滅んでという話があったので、それに一言だけコメントさせていただきたいと思うんですが、一番最初に農業が発展したチグリス、ユーフラテスのメソポタミアとか、ああいうところは、雨が少なくて、農業をやると塩害を起こしちゃって。森林を切って農地にして、少ない雨で作物をつくると、土壌中にどんどん、どんどん、植物が水を吸うときに塩分が集積されて、農業できなくなっちゃった。

ほかの文明も大なり小なり乾燥の影響を受けていて、中国でも、揚子江の南とかでも、結構乾燥します。

日本は雨に恵まれていて、中世に1回、地球全体が温暖化の影響を受けているんですけども、そのときにもほとんど影響を受けてない。気候条件及び地形とかについては極めて恵まれた国で。恵まれ過ぎていて、雨がいっぱい降って地形も豊かなので、地滑りを起こしたりするという問題があって。林業とかやろうとすると、逆に今の時代は、平らなところで植林をしたほうが効率いいですから、林業、農業にとってはちょっと不利な面はありますけれども、そこは工夫次第で。これだけ豊かな自然と地形

に恵まれていますから、そういう点でも、日本の恵まれた気候を生かして、中山間地問題も解決して、新しい社会をつくっていくというのが、やっぱり日本の使命じゃないかなと思います。

そのときに、今日は「地方から世界を変える」というのがテーマですけども、どう変わるのかというのがすごく大事で。やっぱり、最近特に生き残り競争とか、世界的に経済がよろしくないで、何となく競争、競争と叫ばれがちですけども、一方で、やっぱり競争だけではなかなか幸せになれないというのは、皆さんで感じられているところだと思います。

大きな変化はあって、私が成田空港で買って読んだ本に「フリー」という本があって、「ロングテール」という本も書いた有名な、アメリカのIT業界で編集者もやっている人が書いた本ですけども。

今インターネット上でいろんな情報がただで手に入りますね。ウィキペディアもただですし、グーグルアースもただです。グーグルもただ。そういう中で、なぜただで経済が成り立つかということも書いてありますけれども、もう一方で、ただのネットワークを通じて、みんながどうしてあんなに一生懸命ウィキペディアに、お金にもならない時間を使って、原稿を書いたり、情報を提供したりするかというと、やっぱり、人の役にたきたいというよりも、いろんな人が評価してくれる中で、自己実現したい、自分の価値を認められたい、そういうのが非常に重要な動機だ、ということを書いておられて、私もすごく共感しました。いろんな村の価値とか、あるいは大学も九大、東大、京大だけじゃないですし、いろいろな大学にそれぞれの価値があると思うんですけども、そういうのを、広くネットなんかを使って、お金をかけずにアピールできる時代なので、そこは競争ではなくて、むしろ、今まで全然つながりもなかった人たちのつながりをつくって、新しい協力をつくっていく時代じゃないかなと思っています。

環境問題などについては、つつい悪く、悪く考えがちなので、最初に北極の海運の話もしたんですけども、常にいい面と悪い面とありますから、いい方向にもちゃんと目を向けましょう。よく例えに出される、「最近の若者は」というのは、昔から言われていて、プラトンまで言っている話で、最近の若者がどんどんだめになったら今ごろ地球が終わっちゃっていると思うんですけども、常に次の時代って変わってきますから。若者の質も変わっていくわけです。そのいいところに目を向けましょう。地方もなかなか大変な面はありますけれども、それぞれの町や村や、歴史も財産も、自然も持っていますから、そういういいところに目を向けて、知恵を絞りましょう。しかも、自分たちだけでやるんじゃないで、いろんな人の協力を得ることが大切です。同じような村とか、あるいは全然違った国でも——オバマと小浜みたいなつながりですね、名前が一緒だとか。いろんなつながりで、いろんなところの協力を得て、新しい社会をつくっ

ていくというのが、これからの生き方かなというふうに思っています。

時 任 矢原先生、どうもありがとうございました。

いろんな分野の方にパネリストとして来ていただいたので、かなり違った視点からのご意見がいただけたかと思うんですが、たぶん、後半非常にまとまって出てきたのは、多様性を大事にしながら共生を図る、ということかと思います。そのときに、歴史に学ぶこと、また、あとたぶん、地球的な、グローバル的な視点を大事にすること、が大切になると思います。午前の部であったような話を念頭に置きつつ、——ベッカー先生は、鎖国時代の日本を一つの良い例にされました。しかし、あのような一国での完全リサイクル化という状況は、今は、隣の国から降ってくる酸性雨を考えたら成り立たないわけですから。いろんな情報を共有しながら、距離も近いですから、そういう意味で、いろんな知識をみんなで共有し、だけど、個性を失わないように生きていくということを考えれば、地方も、日本も、世界も変わっていく。勿論、良いほうに変わることを期待したいと思いますが、たぶんそういうことだと思います。

とりとめもないまとめになってしまいましたけれども、以上をもちまして、この京都大学附置研センターシンポジウムの第4部、パネイディスカッションを終えたいと思います。

パネリストの先生方、どうもありがとうございました。また、会場の皆さん、どうもありがとうございました。（拍手）